

新生児内科 Neonatal Medicine

1. スタッフ構成(2026年3月時点)

○ 穂吉 眞之介(主任部長、総合周産期母子医療センター副センター長、臨床心理室長)

1995年大分大学医学部卒

専門分野: 新生児集中治療、小児集中治療

資格: 日本小児科学会小児科専門医、日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児)・周産期専門医(新生児)指導医

○ 井上 博晴(部長)

2005年佐賀大学医学部卒

専門分野: 新生児集中治療

資格: 日本小児科学会小児科専門医、日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児)、厚生労働省臨床研修指導医

○ 山内 俊史(部長)

2008年岡山大学医学部卒

専門分野: 新生児集中治療

資格: 日本小児科学会小児科専門医、日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児)、厚生労働省臨床研修指導医

○ 依岡 壮一郎(医長)

2014年愛媛大学医学部卒

専門分野: 新生児集中治療

資格: 日本小児科学会小児科専門医、日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児)

○ 丸山 なつき(医長)

2015年岡山大学医学部卒

専門分野: 新生児集中治療

資格: 日本小児科学会小児科専門医、日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児)、厚生労働省臨床研修指導医

○ 新居田 真生(医長)

2018年自治医科大学卒

専門分野: 新生児集中治療

資格: 日本医師会認定産業医

○ 青木 利紗(医師)

2019年自治医科大学卒

専門分野: 新生児集中治療

○ 澤田 鮎美(専攻医)

2022年自治医科大学卒

専門分野: 新生児集中治療

○ 亀岡 潤也(専攻医)

2023年愛媛大学医学部卒

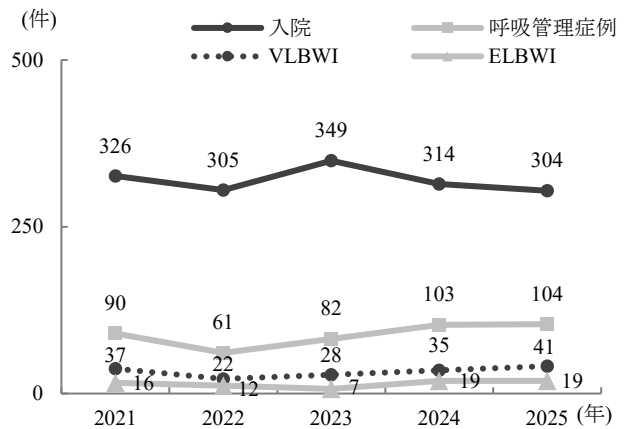
専門分野: 小児一般・保健

○ 穂吉 紀子(診療委託)

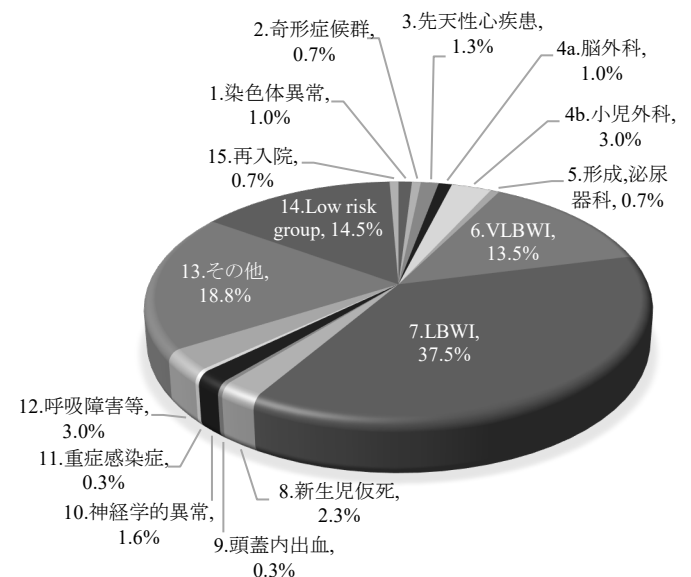
○ 鳥山 みひろ(診療委託)

2. 実績

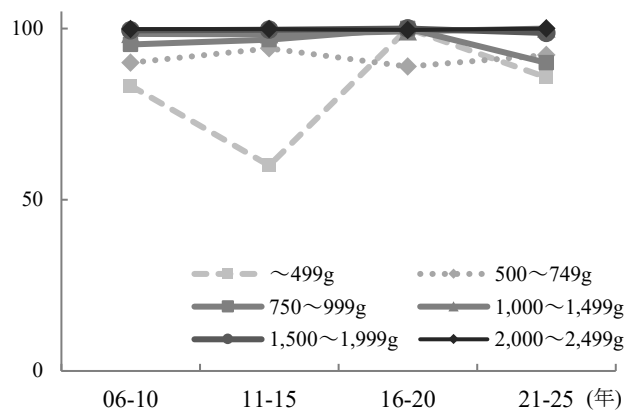
■ 入院数・呼吸管理症例数・極低出生体重児数の推移



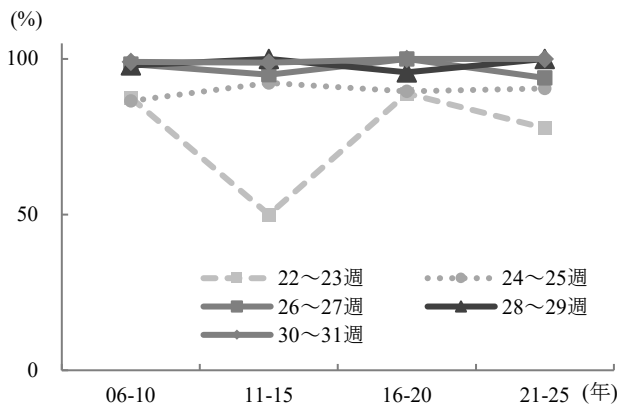
■ 入院児の 카테고리分類: 304 例



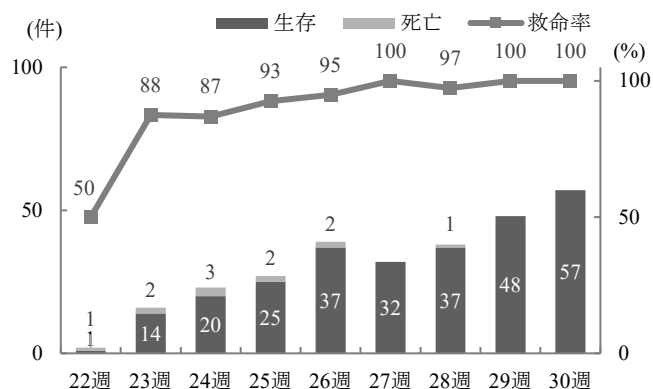
■ 低出生体重児の体重別救命率(先天異常含む)5年ごとの予後 (%)



■ 早産児の在胎週数別救命率(先天異常含む)5年ごとの予後



■ 超早産児の在胎週数別症例数と22~30週の生命予後 (過去10年)



■ 診療実績

疾患名等	件数
入院総数	304
院内出生	273
院外出生	31
死亡症例	4
超低出生体重児:ELBWI	19
極低出生体重児:ELBWIも含む	41
低出生体重児:VLBWIも含む	166
先天性心疾患	4
新生児仮死	8
染色体異常	3
奇形症候群	2
小児外科・脳外科疾患	12
形成外科・泌尿器疾患	1
手術症例	19
呼吸管理症例	104
新生児搬送数:あいあい号出動回数	29
COVID-19 関連	1

4. 学術関係

(1) 学会発表および講演

- 丸山なつき、依岡壮一郎、山内俊史、井上博晴、穂吉眞之介. 出生後早期に発症した食物蛋白誘発胃腸症の9例. 第128回日本小児科学会学術集会. 名古屋 (2025.4.18-20)
- 丸山なつき、依岡壮一郎、山内俊史、井上博晴、穂吉眞之介. 食物蛋白誘発胃腸症の11例. 第109回日本小児科学会愛媛地方会. 松山 (2025.6.1)
- 徳本大起、山内俊史、丸山なつき、依岡壮一郎、井上博晴、穂吉眞之介. 肺サーファクタント蛋白 C 異常を認めた遺伝性間質性肺疾患の一例. 第61回日本周産期・新生児医学会学術集会. 大阪 (2025.7.13-15)
- 穂吉眞之介、井上博晴、山内俊史、依岡壮一郎、丸山なつき. 地方周産期医療の変遷と課題—総合周産期母子医療センターである当院における20年の経験から— 第69回日本新生児育成医学会・学術集会. 横浜 (2025.11.13-15)
- 丸山なつき、依岡壮一郎、山内俊史、井上博晴、穂吉眞之介. 先天性代謝異常症を疑ったビリドキシリン依存症てんかんの1例. 第69回日本新生児育成医学会・学術集会. 横浜 (2025.11.13-15)
- 井上博晴、亀岡潤也、澤田鮎美、青木利紗、新居田真生、丸山なつき、依岡壮一郎、山内俊史、穂吉眞之介. 当院 NICU における医療的ケア児の推移 2010-2024 年での比較検討. 第110回日本小児科学会愛媛地方会. 松山 (2025.11.16)

(2) 論文・著書

- 井上博晴、穂吉眞之介. 新生児の管理と治療 2. 低出生体重児. 産科婦人科疾患最新の治療 2025-2027. (編) 杉山隆、梶山広明、吉野修. 南江堂. (2025.1)

3. 2026 年度目標

総合周産期母子医療センターとしての機能を果たすべく、各地域周産期母子医療センター、小児科と連携して常に受け入れ体制が取れるように準備していきたいと考えています。